

# 國學院大學學術情報リポジトリ

The uses of high-frequency verbs in Japanese learner speaking : a corpus analytical study of the verb get

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鈴木, 陽子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/00002075">https://doi.org/10.57529/00002075</a>

# 英語学習者発話コーパスにみられる日本人学習者の高頻度動詞の使用 —動詞*get*を例に—

## The Uses of High-frequency Verbs in Japanese Learner Speaking: A Corpus Analytical Study of the Verb *Get*

鈴木 陽子

### 【要 旨】

高頻度動詞 (high-frequency verbs) は英語学習者にとって馴染み深い動詞である一方で、習得の難しい項目のひとつである。本研究は、高頻度動詞のひとつである動詞*get*に注目し、英語学習者発話コーパスICNALE-Spoken (Ishikawa, 2014) を用いて、日本人大学生の英語学習者と英語母語話者が英語を発話する際、動詞*get*をどのように使用しているかについて分析と考察を行った。動詞*get*の使用頻度全体をみると、日本人学習者と母語話者の使用には有意な差はみられなかったが、使用される統語構造によって比較すると、日本人学習者は*get+Noun/NP*の構造を過剰使用していることが明らかとなった。この過剰使用は、日本人学習者が*get+money*という連語を過剰使用していることに起因していた。この傾向は書き言葉における傾向とも一致する。一方で、日本人学習者は*phrasal/prepositional get*を過小使用する傾向がみられた。これは書き言葉の場合には観察されなかった違いである。このことは、言語知識として習得している*phrasal/prepositional get*について、日本人学習者が書く際には使用できるものの、発話する際に瞬時に使用できる程には定着させられていないことを示している。

### 【キーワード】

高頻度動詞 動詞 コーパス研究 過剰使用・過小使用 連語

### 【Abstract】

Every language has basic verbs that are frequently used in discourse; such verbs are often called high-frequency verbs. Although these high-frequency verbs are introduced to EFL learners at an early stage and thus are familiar words to them, learners often have problems with the verbs. It is because high-frequency verbs express basic meanings, and they are highly abstract and polysemous. For instance, Nesselhauf (2004) analyzes EFL learners' use of the verbs *make*, *have*, *take*, and *give*, and Altenberg and Granger (2001) focus on the collocations with the verb *make*. Using learner corpora, these studies compare native speaker writing with non-native speaker writing and point out that EFL learners feel safe with some uses of a high frequency verb, while avoiding other uses of the same verb.

This study compares the difference in the use of the verb *get* between Japanese learners of English and native speakers of English in transcriptions of speech data and identifies Japanese learners' characteristics. The data of Japanese learners and native speakers were extracted from the ICNALE-Spoken (the International Corpus Network of Asian Learners of English-Spoken Baby Version 1.2; Ishikawa, 2014). As far as the overall frequency of the verb *get* is concerned, the results show that Japanese learners do not over- or underuse of the verb *get*. However, statistical test results show significant differences in several constructions. First, when Japanese learners use the verb *get*, they highly rely on *get+Noun/NP* construction. This tendency can be attributed to the fact that they significantly overuse the combination, *get+money*. The results also show that Japanese learners

significantly underuse phrasal/prepositional *get* construction. These results indicate that there is a striking difference in the way of using the verb *get* in the *get*+Noun/NP construction between Japanese learners and native speakers.

### 【Keywords】

high-frequency verbs; verb *get*; corpus studies; overuse/underuse; compound words

## 1. はじめに

動詞には談話のなかで高頻度に使用される基本動詞が存在し、それらは高頻度動詞 (high-frequency verbs) とよばれる。高頻度動詞は学習の初期に教えられるため、英語学習者にとって馴染み深い動詞である一方で、習得が難しい項目であると言われている。例えば、Nesselhauf (2004) は英語学習者の *make*、*have*、*take*、*give* の使用について分析し、Altenberg & Granger (2001) は動詞 *make* の連語について分析を行っている。学習者コーパスを分析することによって、これらの研究は英語学習者と英語母語話者の高頻度動詞の使用を比較し、英語母語話者が特定の使用を過剰あるいは過小使用することを明らかにした。

本研究は、日本人学習者と英語母語話者の発話データを用いて、英語の高頻度動詞のひとつである動詞 *get* に注目し、その使用について分析と考察を行う。本研究の研究課題は以下の3点である。

- (ア) 日本人英語学習者は英語母語話者よりも動詞 *get* を過剰あるいは過小使用しているか
- (イ) 日本人英語学習者と英語母語話者には動詞 *get* の使用においてどのような差がみられるか
- (ウ) 書き言葉と話し言葉には違いがみられるか

## 2. 背景

### 2.1 高頻度動詞の特徴

動詞には高頻度動詞 (high-frequency verbs) とよばれる談話のなかで頻繁に使用される基本動詞が存在する。Longman Grammar of Spoken and Written English によれば、英語における高頻度動詞は *say*、*get*、*go*、*know*、*think*、*see*、*make*、*come*、*take*、*want*、*give*、*mean* である (Biber et al., 1999)。高頻度動詞は他の普通動詞とは異なる特徴を持つと言われる。例えば、高頻度動詞について通言語的な観点から考察をした Viberg (1996) は、高頻度動詞の特徴を (i) 基本的な意味を表し、異なる意味領域にまたがる、(ii)

多くの言語において対応する高頻度動詞が存在する、(iii) 極めて抽象的で多義性に富む、としている。高頻度動詞は基本語彙であるため学習者には早い段階で教えられるが、高頻度動詞が持つ上記の特徴が、英語学習者にとって学習を難しくさせているのではないかと指摘されている (Altenberg & Granger, 2001; Lennon, 1996)。学習者の母語における高頻度動詞とそれに対応する英語の高頻度動詞の用法が必ずしも一致しないため、母語干渉によって習得がかえって難しくなってしまう場合もある。

## 2.2 英語学習における高頻度動詞

英語学習における高頻度動詞についての先行文献では、一見すると矛盾する観察がされてきた (Altenberg & Grange, 2001)。Hasselgren (1994) はノルウェー人英語学習者のデータを分析し、学習者が高頻度動詞を過剰使用することを観察した。例えば、上級レベルの学習者でさえ *give* や *get*、*take*、*show*、*have*、*know*、*keep*、*tell*、*make* などの基本動詞に過度に依存していた。このように学習者が安心して使用でき、過剰使用してしまう語や表現は「語彙的テディベア (lexical teddy bear)」と呼ばれている。Källkvist (1999) や Granger (1996) もスウェーデン人学習者やフランス語話者の学習者について似た過剰使用の傾向を観察している。反対に、Sinclair (1991) は英語学習者が高頻度動詞の使用を避けるという観察をしている。Altenberg & Granger (2001) は、このような回避は学習者が高頻度動詞の習得の難しさを認識しているために生じていると説明している。なぜなら、高頻度動詞は多くの場合意味的な動機づけがなく恣意的であり、語と語の結びつきやすさは慣習によって決められているからである。

Altenberg & Granger (2001) は、このような矛盾する解説について妥当な説明を与えている。それは、学習者が高頻度動詞の特定の用法を安心して使用し、過剰使用する傾向にある一方で、別の用法については使用を避けるというものである。例えば、スウェーデン人英語学習者とフランス語話者の学習者は「何かを生産する、作る」という意味での *make* や causative *make* の用法では安心して動詞 *make* を使用していたが、「お金を稼ぐ」の意味での *make* や軽動詞構文における *make* については使用を避ける傾向にあった。また、望月 (2007) は、日本人英語学習者のエッセイライティングデータを英語母語話者のデータと比較し、同様の傾向を観察している。日本人学習者は idiomatic *make* を過剰使用する一方で、軽動詞構文における *make* や phrasal *make* を過小使用していた。

本研究は、Altenberg & Granger (2001) のアプローチに習い、対照中間言語分析 (CIA: Contrastive Interlanguage Analysis) の手法を用いて分析を行う (Granger, 1996, 1998)。この手法は、英語学習者のデータを母語話者のデータと比較し、学習者の中間言語同士を比較することで中間言語の特徴を捉えようとするものである。

## 2.3 書き言葉における動詞 *get* の使用

Suzuki (in press) は、ICNALE-Written (以下ICNALE-Wと略記, Ishikawa, 2013) と

いうエッセイライティングのデータを対象に、日本人英語学習者と英語母語話者の動詞 *get* の使用を比較した。その結果、書き言葉においては、以下のような日本人学習者の特徴が明らかとなった。

- (1) 日本人学習者は動詞 *get* を過剰使用する。
- (2) 日本人学習者は、動詞 *get* を使用する際 *get+Noun/NP* を過剰使用する。この過剰使用は、*get+money/thing/friend/chance* といった連語を過剰使用していることに起因している。
- (3) 日本人学習者は、*get+Adjective* や *have got to do* の構造での *get* を過小使用する。

これまでの先行研究では、高頻度動詞の使用について主に書き言葉を中心に議論がされ、話し言葉における使用についてはまだ十分に分析されていない。本研究は、話し言葉のデータを Suzuki (in press) における結果と比較することで、書き言葉と話し言葉における動詞 *get* の使用の違いについても考察する。

### 3. データと分析方法

#### 3.1 データ

本研究が研究対象とするデータには、ICNALE-Spoken Baby 1.2 (以下ICNALE-Sと略記, Ishikawa, 2014) を用いる。ICNALE (The International Corpus of Network of Asian Learners of English) は、10のアジアの国と地域 (中国、香港、インドネシア、日本、韓国、パキスタン、フィリピン、シンガポール、タイ、台湾) の大学生英語学習者を対象に英語産出データを集めたコーパスで、アジア圏の英語学習者に特化したコーパスとしては公開されている唯一のコーパスである。英語母語話者との比較を可能にするため、母語話者のデータも収録されている。書き言葉コーパスであるICNALE-W (Ishikawa, 2013) は、学習者と英語母語話者のエッセイライティングのデータから構成され、およそ130万語のコーパスとなっている。

本研究で使用するICNALE-Sは、話し言葉に注目したコーパスで、一分間のスピーチの音声データと書き起こされた文字データから成る。2014年9月20日に公開された開発途中のコーパスであるが、英語母語話者に加え、中国、パキスタン、フィリピン、シンガポール、台湾の学習者データを利用することができ、長さ一分間のスピーチデータを1,900本収録している。総語数はおよそ22万語である。

ICNALEを使用するひとつの利点はデータの収集環境が厳密に統制されている点である。具体的には、参加者に課せられるタスクについて、そのトピックや実施時間、長さ、参照文献使用の有無などが明確に決められており、英語母語話者を含めすべての参加者が同じ条件下で英語の産出を行っている。このような方法を用いることにより、データ収集

の違いによって生じる差異の可能性を排除し、対象分析における信頼性を確保することが可能となる。例えば、ICNALE-Wでは、参加者は「[トピックA]「大学生がアルバイトをすることは重要である」、もしくは「[トピックB]「レストランでの喫煙はすべて禁止されるべきだ」といったトピックに対して、理由を挙げて賛成か反対かを論じることが求められる。ICNALE-Sでは、参加者は同じトピックについて英語で意見を述べるというタスクが課され、そのスピーチデータが収録されている。したがって、ICNALE-Sに収録されているデータはすべてダイアログではなくモノログである。

本研究では大学生の日本人英語学習（JL）のデータと英語母語話者（NS）とのデータを比較することによって、発話における動詞*get*の使用の違いについて分析を行う。今回の分析対象とするデータの詳細は以下の通りである（表1参照）。ICNALE-Sには日本人学習者100人と英語母語話者75人の発話データが含まれており、スピーチ数は日本人学習者データが400本、英語母語話者データが300本である。それぞれのデータの総語数は日本人学習者データが27,858、英語母語話者データが46,399となっている。

表1 データ内の総語数とスピーチ数

	JL	NS
総語数	27,858	46,399
スピーチ数	400	300

日本人学習者の習熟度は、学生のTOEICやTOEFLのスコアに応じて4つのCEFR（Common European Framework of Reference, ヨーロッパ言語共通参照枠）レベルに分類されている。CEFRは本来A1, A2, B1, B2, C1, C2の6つのレベルで言語能力を分類しているが、Ishikawa（2013）はアジア圏の英語学習者の英語能力をより把握しやすくするため、A1レベルを削除し、B2とC1, C2を合わせてB2+とし、B1をB1\_1とB1\_2に細分化している。本研究もその分類に従う。表2はIshikawa（2013）の4つのカテゴリーに応じて日本人学習者の割合と人数を示したものである。これをみると、半分以上の学生がB1レベルに集中していることがわかる。

表2 習熟度別の日本人学習者の割合と人数（括弧内は人数）

	A2	B1_1	B1_2	B2+
JL	14.0% (14)	34.0% (34)	27.0% (27)	25.0% (25)

母語話者75人は、アメリカ合衆国42人（56%）、イギリス13人（17.3%）、オーストラリア9人（12%）、カナダ9人（12%）、ナイジェリア1人（1.3%）、ニュージーランド1人（1.3%）で構成されている。また、前述した通り、母語話者は学習者と同じタスクに取り組み、発話を行っている。

### 3.2 分析方法

用例の抽出や頻度の計算にはコンコーダンスとして*AntConc 3.3.5m* (Anthony, 2013) を使用した。まずは、日本人英語学習者と英語母語話者のそれぞれのデータについて動詞 *get* の使用頻度を調査し、日本人英語学習者が動詞 *get* を過剰あるいは過小使用しているかについて分析を行った。次に、動詞 *get* を含むすべての用例をその統語構造に応じて8つのカテゴリーに分類し、それぞれのカテゴリーに入る用例の頻度について比較を行った。2つのデータの頻度の比較にはカイ二乗検定を用いた。Altenberg & Granger (2001) や望月 (2007) などの先行文献における手法に従い、それぞれのデータについて *get* を含む用例の頻度と *get* を含まない用例の頻度 (総語数 - *get* を含む用例の頻度) の差からカイ二乗統計量を計算し、5%水準で有意差の判定を行った。頻度が4以下だった場合にはカイ二乗検定を行うことが適切ではないため、フィッシャー正確確率検定を用いて分析を行った。

## 4. 結果と考察

### 4.1 動詞 *get* の使用頻度

まず、動詞 *get* の全体の使用頻度について日本人英語学習者と英語母語話者のデータを比較した。表3は *get* の頻度の実測値と10万語あたりの正規化数値を示している。この表からもわかるように、動詞 *get* の使用について日本人英語学習者と英語母語話者の使用には有意な差はみられなかった ( $\chi^2=0.12, p=.73$ )。この結果は書き言葉における動詞 *get* の使用について調査した、Suzuki (in press) の結果とは異なる。書き言葉では日本人学習者が *get* を過剰使用していたのに対し、話し言葉では日本人学習者と母語話者との間には有意な差がみられなかった。これは、英語母語話者が書き言葉において *get* の使用を控えている一方で、話し言葉でより頻繁に *get* を使用していることの表れと捉えることができる。

動詞 *get* 全体の使用頻度には有意な差がみられなかったが、より詳細に、動詞 *get* をどのような統語構造のなかで使用しているかという観点から分析するならば、日本人英語学習者と母語話者との間にはその使用に違いがあるのだろうか。次節以降では、動詞 *get* が用いられる統語構造に注目して、その使用の分布を比較していく。

表3 動詞 *get* の使用頻度

	JL	NS	$\chi^2$
<i>get</i>	96	167	$\chi^2 = 0.12 (p=.73)$ n.s.
normalized <i>get</i> (per 100,000 words)	344.60	359.92	N/A

## 4.2 動詞*get*の主な用法

動詞*get*はさまざまな統語構造において、さまざま意味を表す。Biber, Leech, Conrad & Finegan (1999)における分類によると、動詞*get*の用法は大きく8つのカテゴリーに分類される。本研究は、この分類に従い、データから得られたすべての*get*の用例についてこの8つのカテゴリーに基づいてコーディングを行った。動詞*get*が不完全な発話の一部として使用されているなど統語構造が特定できない場合には、その他として分類した。その他に分類された用例の数は、日本人学習者については12例、母語話者については10例であった。表4は8つのコーディングカテゴリーとデータ内に観察された例を挙げている。

表4 コーディングカテゴリー：動詞*get*の主な用法

統語構造	例
1) <i>get</i> +Adverbial	<i>get in school</i>
2) <i>get</i> +Adjective	<i>get sleepy, get happier</i>
3) <i>get</i> +Noun/NP	<i>get a part-time job, get enough sleep</i>
4) Ditransitive <i>get</i>	<i>get them a job</i>
5) Causative <i>get</i>	<i>get them ready, get them to quit smoking</i>
6) have got to do	<i>have got to know the basics</i>
7) <i>get</i> to do	<i>get to know the risk</i>
8) Phrasal/prepositional <i>get</i>	<i>get used to, get along with, get rid of, get by</i>

コーディングを行った結果、それぞれのカテゴリーの頻度は表5に載せた通りであった。これをみると、日本人学習者も母語話者も最も使用頻度の高い統語構造が*get*+Noun/NPであるという点は共通している。しかし、日本人学習者は動詞*get*の使用の約8割、その他として分類されたものを除外すると約9割を*get*+Noun/NPという統語構造で使用しており、この統語構造に極端に依存しているように見える。実際、それぞれのデータにおける頻度の差についてカイ二乗検定を行うと、日本人学習者がこの構造を有意に過剰使用していることがわかる ( $\chi^2 = 6.82, p < .01$ )。一方で、日本人学習者はphrasal/prepositional *get*を過小使用している ( $p < .001$ )。

表5 日本人学習者と英語母語話者の動詞*get*の使用

	JL	NS	$\chi^2 / p$ values
1) <i>get</i> +Adverbial	0	6	$p = .21, n.s.$
2) <i>get</i> +Adjective	5	21	$p = .50, n.s.$
3) <i>get</i> +Noun/NP	76	84	$\chi^2 = 6.82 (p < .01)$ overuse
4) Ditransitive <i>get</i>	0	3	$p = .30, n.s.$

5) Causative <i>get</i>	0	6	$p = .21$ , n.s.
6) have got to do	0	2	$p = .53$ , n.s.
7) <i>get</i> to do	2	12	$p = .10$ , n.s.
8) Phrasal/prepositional <i>get</i>	1	24	$p = .00023$ ( $p < .001$ ) underuse
動詞 <i>get</i> の頻度	96	167	$\chi^2 = 0.12$ ( $p = .73$ ) n.s.
総語数	27,858	46,399	

#### 4.3 Get+Noun/NPにおける使用

日本人学習者は動詞*get*を使用する際、*get*+Noun/NPの構造で過剰使用しているが、その際どのような名詞（句）と共に*get*を使用しているのだろうか。表6は*get*の直接目的語として使用されている名詞のうち、頻度の高い順に10項目をリスト化したものである。このリストによると、多くの名詞が日本人学習者と母語話者の両方に使用されているが、日本人学習者がとりわけ*get*+moneyという連語で動詞*get*を使用していることがわかる。

表6 動詞*get*の直接目的語になる名詞（上位10項目）

JL		NS	
1	<i>money</i>	41	<i>job</i> 16
2	<i>experience</i>	9	<i>experience</i> 10
3	<i>smoke</i>	5	<i>money</i> 9
4	<i>job</i>	3	<i>smoke</i> 5
5	<i>thing</i>	3	<i>cancer</i> 3
6	<i>cancer</i>	2	<i>choice</i> 3
7	<i>experiment</i>	2	<i>smoking</i> 2
8	<i>harm</i>	2	<i>craving</i> 2
9	<i>opportunity</i>	2	<i>drink</i> 2
10	<i>smoking</i>	2	<i>grade</i> 2

動詞*get*の直接目的語にくる名詞として、日本人学習者に高頻度で使用されている上位5項目を母語話者データにおける頻度と比較をした結果が表7である。日本人学習者は*get*+Noun/NP という統語構造において*get*+moneyという連語を過剰に使用していることがわかる ( $p < .001$ )。したがって、*get*+Noun/NPの過剰使用は*ge*+moneyの過剰使用によって説明することができる。

表7 日本人学習者と英語母語話者の*get*+Noun/NPの使用

	JL	NS	$\chi^2 / p$ values
<i>get+money</i>	41	9	$\chi^2 = 42.24$ ( $p < .001$ ) overuse
<i>get+experience</i>	9	10	$\chi^2 = .79$ , n.s.
<i>get+smoke</i>	5	5	$\chi^2 = .66$ , n.s.
<i>get+job</i>	3	16	$p = .058$ , n.s.
<i>get+thing</i>	3	0	$p = .053$ , n.s.

また、*get*+Noun/NPのタイプ頻度に注目すると、日本人学習者は15であるのに対して母語話者は36となっており、日本人学習者が母語話者と比較して極めて限られた名詞との連語（そのほとんどが名詞*money*との連語）によって*get*を使用していることがわかる。興味深いのは、この結果が書き言葉における振る舞いとは逆転しているという点である。つまり、書き言葉においては、日本人学習者の方がさまざまな名詞と組み合わせて*get*+Noun/NPを産出していたが、話し言葉では日本人学習者が使用できる組み合わせは母語話者よりも限られてしまっていた。このことは、使用できる表現のバリエーションが書き言葉と話し言葉で異なることを示している。

#### 4.4 Phrasal/prepositional *get*の使用

日本人英語学習者はphrasal/prepositional *get*という構造を過小使用していた。データ内に観察された唯一のデータは(4)のように*get up*の使用であった。これは、*get*の表現としては最も基礎的なものと言えるだろう。

- (4) ... some students can't - can't *get up* in next morning so they can't attend ... (JPN\_PTJ2\_028\_B1\_1.txt)

一方で、母語話者はさまざまなphrasal/prepositional *get*の表現を使用している。以下は、その例の一部である。

- (5) They learn how to *get along with* people, whether they like the people or not, and .... (ENS\_PTJ1\_059\_XX0.txt)
- (6) I want to enjoy the food that I'm tasting not having to have a taste of the cigarette smoke in my face all the time. It *gets in - in the way* of the enjoyment and my time out with my friends enjoying that wonderful time having a good meal together. (ENS\_SMK1\_034\_XX\_0.txt)
- (7) ... it's really good that students should have some kind of part-time work before graduation because they help us to *get used to* the work life and scheduling

ourselves and managing between working and studying. (ENS\_PTJ2\_072\_XX0.txt)

書き言葉では日本人学習者が母語話者と同程度に phrasal/prepositional *get* を使用することができていたことを考慮すると、phrasal/prepositional *get* が日本人学習者には発話する際にすぐに取り出せる程度には十分定着していないのではないかと考えられる。

## 5. まとめ

本研究は英語学習者発話コーパス ICNALE-S を用いて、日本人英語学習者と英語母語話者の動詞 *get* の使用を比較した。その結果、以下の点が明らかとなった。

- (9) 動詞 *get* の全体の使用頻度には日本人学習者と母語話者には有意な差はみられなかった。
- (10) 日本人学習者は動詞 *get* を使用する際、*get*+Noun/NP という統語構造を過剰使用していた。この過剰使用は、*get*+*money* という連語を過剰使用していることが原因である。この傾向は書き言葉における傾向と一致している。
- (11) 日本人学習者は phrasal/prepositional *get* を過小使用していた。この傾向は書き言葉の場合には観察されなかった違いである。このことは、日本人学習者がいくつかの phrasal/prepositional *get* の表現を知っており、書く際には使用することができるものの、同じ表現を発話の際に瞬時に使用することができる程度には定着させられていないことを示している。

ICNALE-S では、日本だけでなく他のアジアの国々の学習者のデータも利用可能であるため、今後は他の地域、とりわけ英語が第二言語として使用されている地域の学習者の使用を日本人学習者の使用と比較したい。

## 参考文献

- Altenberg, B., & Granger, S. (2001). The grammatical and lexical patterning of MAKE in native and non-native student writing. *Applied Linguistics*, 22 (2) , 173-195.
- Anthony, L. (2013). AntConc (Version 3.3.5m) [Computer Software]. Tokyo, Japan: Waseda University. Available from <http://www.antlab.sci.waseda.ac.jp/>
- Biber, D., & Reppen, R. (1998). Comparing native and learner perspectives on English grammar: A study of complement clauses. In S. Granger (Ed.), *Learner English on computer* (pp. 145-158). London: Longman.
- Biber, D., Johansson, S., Leech, G., Conrad, D., & Finegan, E. (1999). *Longman grammar of spoken and written English*. Harlow: Pearson.

- Biber, D., Conrad, S., & Cortés, V. (2004). *If you look at...: Lexical bundles in university teaching and textbooks*. *Applied Linguistics*, 25 (3), 371-405.
- Granger, S. (1996a). From CA to CIA and back: An integrated approach to computerized bilingual and learner corpora. In Aijmer K., Altenberg B., & M. Johansson M. (Eds.), *Language in contrast: Text-based cross-linguistic studies* (pp. 37-51). Lund: Lund University Press.
- Granger, S. (1996b). Romance words in English: From history to pedagogy. In J. Svartvik (Ed.), *Words: Proceedings of an international symposium* (pp. 105-121). Stockholm: Almqvist and Wiksell International.
- Granger, S. (Ed.). (1998). *Learner English on computer*. London, UK: Longman.
- Granger, S. (2011). From phraseology to pedagogy: Challenges and prospects. In T. Herbst, P. Uhrig & S. Schller (Eds.), *Chunks in the description of language: A tribute to John Sinclair* (pp. 123-146). Berlin & New York: Mouton de Gruyter.
- Hasselgren, A. (1994). Lexical teddy bears and advanced learners: A study into the ways Norwegian students cope with English vocabulary. *International Journal of Applied Linguistics*, 4, 237-260.
- Ishikawa, S. (2013). The ICNALE and sophisticated contrastive interlanguage analysis of Asian learners of English. In S. Ishikawa (Ed.), *Learner corpus studies in Asia and the world Vol. 1*, (pp. 91-118). Kobe: Kobe University.
- Ishikawa, S. (2014). Design of the ICNALE-Spoken: A new database for multi-modal contrastive interlanguage analysis. In S. Ishikawa (Ed.), *Learner corpus studies in Asia and the world, 2* (pp. 63-76). Kobe, Japan: Kobe University.
- Ishikawa, S. (2014). The ICNALE-Spoken (Version Baby 1.2) [Digital Data]. Kobe, Japan: Kobe University. Available from [http://language.sakura.ne.jp/s/kaken\\_icnales\\_call.html](http://language.sakura.ne.jp/s/kaken_icnales_call.html)
- Källkvist, M. (1999). *Form-class and task-type effects in learner English: A study of advanced Swedish learners*. Lund: Lund University Press.
- Lennon, P. (1996). Getting “easy” verbs wrong at the advanced level. *International Review of Applied Linguistics in Language Teaching*, 34, 23-36.
- 望月通子 (2007) 「日本人大学生のEFL学習者コーパスに見られるMAKEの使用」『関西大学外国語教育研究』, 第14号, 31-45. 関西大学.
- Nesselhauf, N. (2004) . Learner corpora and their potential for language teaching. In J. Sinclair (Ed.), *How to use corpora in language teaching* (pp. 125-152). Amsterdam: John Benjamins.
- Sinclair, J. (1991). *Corpus, concordance, collocation*. Oxford: Oxford University Press.
- Suzuki, Y. (in press). The uses of *get* in Japanese learner and native speaker writing: A corpus-based analysis. *Komaba Journal of English Education*, 6. Tokyo, Japan: The University of Tokyo.
- Viberg, Å. (1996). Cross-linguistic lexicology: The case of English *go* and Swedish *gå*. In K. Aijmer, B. Altenberg & M. Johansson (Eds.), *Language in contrast* (pp. 151-182). Lund: Lund University Press.